

ねん がつ にち  
2020年7月18日

ねんかんたい しゅじつ  
年間第16主日

きくち いさおだい しきょう せつきょう  
菊地功大司教 ミサ説教

「すべてに心を配る神はあなた以外におられない」と、知恵の書は記していました。

わたしたちはこの世界が、創造主である神によって支配されていることを信じています。神は「正義の源」であるその力を通じて「万物を支配することによって、すべてをいとおしむ方」であると、わたしたちは信じています。

しかしながら、同時にわたしたちは、この世界が様々な矛盾に包まれていることも知っています。神が、その愛といつくしみをもって創造された世界であるにもかかわらず、そこに大きな矛盾が生じるのはなぜなのか。

それは例えば、環境破壊もその矛盾の一つであります。いったいなぜ、そのような矛盾が生じるのでしょうか。

教皇フランシスコの回勅「ラウダート・シ」には、こう記されています。

「わたしたちがずうずうしくも神に取って代わり、造られたものとしての限界を認めるのを拒むことで、創造主と人類と全被造界の間の調和が乱されました。このことによって、わたしたちに賦与された、地を『従わせ』、『そこを耕し、守る』という統治の任にゆがみが生じたのです (66)」

すなわち、人間の欲望や思い上がりが、あたかも人間が神の座を奪い取り、神の存在なしですべてをコントロールできるかのように勘違いをさせ、勝手な行動を続けてきたがために、この世界に矛盾を生じさせてしまったのだと、教皇は指摘されます。

人間の生を成り立たせているのは、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわり」であるにもかかわらず、その三つのかかわりは、外面的にも内面的にも引き裂かれてしまった。その三つのかかわりが引き裂かれた状態こそ、罪であると、教皇は述べています。

大きな災害に襲われるとき、大自然の脅威の前にたたずみ、わたしたちは人間の力や知恵がいかに小さな存在であるかを思い知らされてきました。同様に、今年の初めから続いている新型コロナウイルスによる感染症によってわたしたちは、目に見えない小さなウイルスの前で、人間の力がどれほど弱いものであるのか、人間のいのちがいかにもろい存在であるのかを、あらためて思い知らされました。

思い知らされる時、わたしたちは一時的に、謙遜に生きる決意を心に刻みます。思い上がりを正さなければと、心に誓います。残念なことに、その決意は長続きしません。長続きするのであれば、わたしたちは真摯に神の前で謙遜に生き、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわり」を、それぞれ大切に作る世界を構築してきたことでしょう。しかし現実異なります。すぐに忘れてしまうわたしたちは、繰り返し人間の欲望に負け続け、大きな矛盾はわたしたちの共通の家の破壊につながりました。

マタイ福音には厳しい言葉が記されていました。

創造主である神は、良い麦も後で蒔かれた毒麦も、共に育つことを容認するけれども、最終的には刈り入れの時に峻別すると記されていました。一般的に、このたとえでの刈り入れの時は、世の終わりの最後の審判です。

いまの世界は、まさしく神が創造された良い麦と、人間の欲望が生み出した悪

い麦が、混じり合って共に育っているような状況です。刈り入れの時まで待  
っておられる主は、決して悪の存在を容認しているのではなく、峻別できる  
そのときを待っておられるのだと福音は記します。

パウロはローマの教会への手紙に、「人の心を見抜く方は、霊の思いが何で  
あるかを知っておられます」と記します。その上で、聖霊がわたしたちの祈り  
を執り成してくださるとも記します。

わたしたちは、「わたしたちに賦与された、地を『従わせ』、『そこを耕し、守  
る』という統治の任」を忠実に果たすように求められています。すなわち、  
この世にはびこる毒麦をしっかりと識別して、それを良い麦へと変えていくこ  
と。そのために、良い麦と毒麦をしっかりと峻別できる識別の目を与えてく  
ださるように、聖霊の取りなしと導きを祈ること。

わたしたちはあらためて天地の創造主である神の前で謙遜になり、いのちを与  
えられているものとして、人間の欲望ではなく、神の導きに従って、この共通  
の家を「耕し、守る」務めを果たしていかななくてはなりません。刈り入れの時  
までに、力の限りをつくして、悪い麦を減らし、良い麦へと変えていく努力  
を続けなくてはなりません。

教皇フランシスコは、昨年11月に日本を訪れた際、首相官邸で政府や外交団  
の関係者に話をされました。その中で、次のように述べています。

「地球は自然災害だけでなく、人間の手によって貪欲に搾取されることによ  
っても破壊されています。被造物を守るという責務を国際社会が果たすのは困  
難だとみなすとき、ますます声を上げ、勇気ある決断を迫るのは若者たちです。  
若者たちは、地球を搾取のための所有物としてではなく、次の世代に手渡す  
べき貴重な遺産として見るよう、わたしたちに迫るのです。わたしたちは彼

らに<sup>たい</sup>対し、むなしいことばでではなく、<sup>せいじつ</sup>誠実にこたえなければなりません。ま  
やかしではなく、<sup>じじつ</sup>事実によって、こたえるのです」

その上で<sup>うえ</sup>教皇は、<sup>せかい</sup>世界が<sup>きょうつう</sup>共通の<sup>いえ</sup>家を守るために<sup>れんたい</sup>連帯して<sup>とく</sup>取り組むようにと求  
め、<sup>つぎ</sup>次のように<sup>の</sup>述べられました。

「<sup>にんげん</sup>人間の<sup>そんげん</sup>尊厳が、<sup>しゃかい</sup>社会的、<sup>けいざい</sup>経済的、<sup>せいじ</sup>政治的<sup>てきかつどう</sup>活動、それらすべての<sup>ちゅうしん</sup>中心になけ  
ればなりません。<sup>せ</sup>世代間の<sup>れんたい</sup>連帯を<sup>そくしん</sup>促進する<sup>ひつよう</sup>必要があり、<sup>しゃかい</sup>社会生活においてどん  
な<sup>たち</sup>立場にあっても、<sup>わす</sup>忘れられ、<sup>はいじよ</sup>排除されている<sup>ひと</sup>人々に<sup>おも</sup>思いを<sup>よ</sup>寄せなければなり  
ません。・・・<sup>こどく</sup>孤独に<sup>くる</sup>苦しむ<sup>こうれい</sup>高齢者や、<sup>みよ</sup>身寄りのない<sup>ひと</sup>人の<sup>かんが</sup>ことも<sup>けつ</sup>考えます。結  
局のところ、<sup>かつこく</sup>各国、<sup>かくみんぞく</sup>各民族の<sup>ぶんめい</sup>文明というものは、<sup>けいざい</sup>その<sup>りよく</sup>経済力によってではな  
く、<sup>こんきゅう</sup>困窮する<sup>ひと</sup>人に<sup>こころ</sup>どれだけ<sup>くだ</sup>心を<sup>う</sup>砕いているか、そして、<sup>まも</sup>いのちを<sup>ちから</sup>生み、<sup>ちから</sup>守る力  
があるかによって<sup>はか</sup>測られるものなのです」

<sup>ちえ</sup>知恵の<sup>しょ</sup>書に、「<sup>かみ</sup>神に<sup>したが</sup>従う<sup>ひと</sup>人は<sup>にんげん</sup>人間への<sup>あい</sup>愛を<sup>も</sup>持つべきことを、あなたはこれらの<sup>ごう</sup>業  
を<sup>とお</sup>通して<sup>ごたみ</sup>御民に<sup>おし</sup>教えられた。こうして<sup>ごたみ</sup>御民に<sup>きぼう</sup>希望を<sup>だ</sup>抱かせ、<sup>つみ</sup>罪からの<sup>えしん</sup>回心をお与  
えになった」と<sup>しる</sup>記されていました。

<sup>にんげん</sup>人間の<sup>わが</sup>わがままな<sup>こころ</sup>心の<sup>おも</sup>思いを<sup>しゅちよう</sup>主張し<sup>つづ</sup>続けるのではなくて、<sup>あい</sup>愛を<sup>こ</sup>込めてこの<sup>せ</sup>世  
界を、<sup>わたし</sup>私たちの<sup>いのち</sup>いのちを<sup>そうぞう</sup>創造された<sup>かみ</sup>神の<sup>いつくしみ</sup>いつくしみと<sup>あい</sup>愛に<sup>み</sup>満ちた<sup>こころ</sup>心に、<sup>みみ</sup>耳を<sup>かたむ</sup>傾  
けるときです。すべての<sup>いのち</sup>いのちを守るために、<sup>はいじよ</sup>排除ではなく<sup>たが</sup>互いに<sup>ささ</sup>支え<sup>あ</sup>合いな  
がら、「<sup>かみ</sup>神とのかかわり、<sup>りんじん</sup>隣人とのかかわり、<sup>だいち</sup>大地とのかかわり」を<sup>たいせつ</sup>大切にす  
るときです。<sup>にんげん</sup>人間の<sup>そんげん</sup>尊厳を<sup>かか</sup>掲げて、<sup>れんたい</sup>連帯のうちに<sup>たが</sup>互いの<sup>いのち</sup>いのちへの<sup>おも</sup>思いを<sup>は</sup>馳せ  
るときです。